

黙示録1章18節「御手の中の教会」

1A 生きておられる方

1B 六十年後の教会

2B 死とよみの鍵

3B 王たちの支配

2A 只中におられる方

1B 七つの燭台

2B 右手の星

本文

黙示録 1 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、黙示録に入っています。午後礼拝で1章全体を一節ずつ見ていきますが、今朝は18節を中心に見ていきます。「**生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。また、死とよみの鍵を持っている。**」

1A 生きておられる方

1B 六十年後の教会

時は、紀元後90年代です。主が、よみがえられ昇天されてから、60年を経ています。ローマ帝国は、ドミティアヌス帝が支配していました。彼は、自らを神として、教会に対する迫害を強めていました。イエス様の十二使徒のうち、ヨハネを除く全員が、殉教していました。ヨハネも処刑されそうになったのですが、奇跡的に守られたと言われています。それで、パトモス島に流刑になりました。そこで、この啓示を受けました。

教会は、長いこと苦しみの中にありました。その中で、使徒たちが教えているところから離れて、妥協してしまっているところもありました。迫害がそれほどひどくないところでは、生ぬるくもなっていました。六十年経っている中で、イエスがよみがえられ、今も生きておられるという実感や切迫感が薄くなっていました。私たちも、一人一人の信仰生活の中で、また教会生活の中でも、このような霊的危機を迎えると思います。イエスがよみがえられたけれども、今の自分に対しても生きておられるという実感が、薄まっているという危機です。

その中で、ヨハネに現れてくださったのが、よみがえられたイエス様です。ここで、「**わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。**」とあります。主は、私たちの罪のために十字架につけられ、死なれ、葬られました。三日目によみがえられました。そして天に昇られました。そして、私たちの頭の中で、いつの間にか、この方が今も生きておられるということが忘れてしまいます。

主は言われました。「マタ 18:20 二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです。」主は、ご自身の名によって集まっている私たちのところにも、その中におられるのです！弟子たちのいるところに、よみがえられた主が現れてくださったように、目に見えなくとも、おられるのです。

弟子たちも、目に見えなかったので、主がそこにおられることに気づいていませんでした。主がからだを持って現れた時、弟子トマスだけがそこにいませんでした。ヨハネ 20 章 25 節から読みます、「ヨハ 20:25-27 そこで、ほかの弟子たちは彼に「私たちは主を見た」と言った。しかし、トマスは彼らに「私は、その手に釘の跡を見て、釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません」と言った。八日後、弟子たちは再び家の中におり、トマスも彼らと一緒にいた。戸には鍵がかけられていたが、イエスがやって来て、彼らの真ん中に立ち、「平安があなたがたにあるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスが、「釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません」と言った会話も、主はそこにおられたので、すべて聞いておられたのです。

私たちは新しい契約によって、御霊によって、手に触れることができるかのように、主が生きておられるのを知ることができます。しかし、いろいろな試練や世の思い煩い、誘惑によって、その信仰による受け止め、働きをどこかでやめてしまい、それで、主が生きておられるのに、心が鈍くなってしまうのです。

2B 死とよみの鍵

そして、生きて現れてくださったイエス様は、ヨハネに、「**また、死とよみの鍵を持っている**」とされています。これはまさに、主が初めて教会について弟子たちに語られた、あの言葉のことです。ペテロが、イエスを「あなたは生ける神の子キリストです。」と告白した後に、それを祝福されました。「マタ 16:18 そこで、わたしもあなたに言います。あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。」

イエスが、ピリポ・カイサリアというところでこの言葉を語られたということが、とても大事です。なぜなら、そこはヘルモン山のふもとだからです。ペテロは、小石というような意味のギリシア語ですが、岩、ペトラは、そのヘルモン山の岩壁のことを指しています。それほどまでに、堅く、揺らぐことのない岩です。それから、そこにはギリシアの神パンというのが拝まれている場所があります。岩壁に洞窟になっていますが、そこから泉が出ていました。そこに動物のいけにえを献げていました。献げて、水の中に消えたら、パンがその犠牲を受け入れ、血の跡が見えたら受け入れなかったしるしだとされていました。

ギリシアには、ハデスという神がいました。冥界の神です。それは、死者の血を呑み干すとも言われていました。パンの神への献げものであると同時に、ハデスの門ともされました。¹そこで、イエスが言われたのは、「よみの門もそれに打ち勝つことはできません」という言葉です。つまり、教会は、神の権威が現れるところであり、イエスが死者の中からよみがえられたことによって、これらの霊的勢力、サタンや悪霊どもの力を完全に制圧して、さらしものにするところの力だということです。それが、たとえ自分が信仰のゆえ死んだとしても、決してそれで終わりにさせない、よみがえりの力だということです。

私たち教会が、このように主によって、死とよみの力、死とハデスの力に打ち勝ち、その鍵を持っている、すなわち完全に掌握している存在であります。この世という大海にある島のように、何とか信仰をもって孤立しているのが教会ではありません。これら、死と暗やみの力に対して、圧倒的な、よみがえりの力によって、いのちの支配の中に人々を従わせていくのです。守りではなく、攻めている存在なのです！

3B 王たちの支配

ところで、主がよみがえられたというのは、そこには天地万物を造られた御子が公に現れたことを意味します。「ロマ 1:4 聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」よみがえられたということが、どれほどのことなのかを、ヨハネが黙示録 1 章の中で語っています。「また、確かな証人、死者の中から最初に生まれた方、地の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにあるように。」ここの、「死者の中から最初に生まれた方」が、よみがえりのことです。そうすると、「地の王たちの支配者」だということなのです。この背後に入るのは、詩篇二篇です。ちょっと長くなりますが、7-12 節を読んでみましょう。

⁷「私は主の定めについて語ろう。主は私に言われた。『あなたはわたしの子。わたしが今日 あなたを生んだ。

⁸ わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。地の果ての果てまで あなたの所有として。

⁹ あなたは 鉄の杖で彼らを牧し 陶器師が器を砕くように粉々にする。』」

¹⁰ それゆえ今 王たちよ 悟れ。地をさばく者たちよ 慎め。

¹¹ 恐れつつ 主に仕えよ。おののきつつ震え 子に口づけせよ。

¹² 主が怒り おまえたちが道で滅びないために。御怒りが すぐにも燃えようとしているからだ。幸いなことよ すべて主に身を避ける人は。

7 節の「わたしが今日 あなたを生んだ。」とあります。これがよみがえりです。神の御子、世継ぎ

¹ <https://c4israel.com.au/articles/pandemic-and-the-god-pan/>

の子ですから、国々の支配者であり、王たちは御子に対してひれ伏します。イエスは私たちの教会のかしらであられ、かつ王の王、主の主であられるのです。

2A 只中におられる方

1B 七つの燭台

そしてこの方が、繰り返しますが、私たち教会の只中におられます。ヨハネの見た幻では、「その燭台の真ん中に、人の子のような方が見えた。」とあります(13 節)。七つの燭台があるのですが、その真ん中におられたのです。そしてその姿は、神々しい、恐ろしいほどの、光り輝く姿であり、ヨハネは倒れて、死人のようになってしまいました。

私たちが、礼拝を献げるといふことは、この地上の王たちの支配者、神の子、そして、光の中に住まわれる方の前でひれ伏すということなのです。ヘブル語では、礼拝を献げることについて、「お迎えする」という意味があるそうです。つまり、私たちが、この荒川区西日暮里の場所に来て、何かお荷物をここに持ってきたかのように、ささげ物を持ってきましたというようなものではありません。すでに王がおられて、御座に着いておられて、この方を自分の心にお迎えすることです。

しかし、私たちは、礼拝に対してこのような姿勢を持っているでしょうか？つまり、天地万物を造られた方、神の御子、地上の王たちの王の前に参上し、参拝するという思いで臨んでいるでしょうか？礼拝に、気が向いたら集う。賛美はスキップしても構わない、とかしている時に、すでに自分自身が、栄光の主イエスの前に出るという思いがどこかにいってしまっていないか？

マラキの預言は、神殿での奉仕がマンネリ化して、いい加減になっている祭司たちに対する、主の叱責の言葉があります。「1:8 あなたがたは盲目の動物を献げるが、それは悪いことではないのか。足の萎えたものや病気のものや病気のものを献げるのは、悪いことではないのか。さあ、あなたの総督のところへそれを差し出してみよ。彼はあなたを受け入れるだろうか。あなたに好意を示すだろうか。——万軍の【主】は言われる——」当時は、ペルシアの支配下にあったエルサレムです。そこで政治指導者で、権力者は総督であります。主に対しては、盲目の動物、足の萎えたものや病気のことを献げているのですが、総督に対しては、最善の敬意を示して、最善の贈り物を用意するではないか？ということなのです。

もし、私たちの教会に、岸田首相がいらっしゃるといふことになったらどうですか？皇族の方がいらしたらどうですか？天皇陛下がいらしたら？お迎えするために、あらゆる用意をするのではないですか？では、それら上にいる人々の、さらに上にいる人々、日本の国家予算を使ってでも、最上のものを用意すべき、王の王、主の主であるキリストの前に出るのに、どうして中途半端なものだけを献げようとするのでしょうか？自分の最善を献げます。

2B 右手の星

そして、イエスは幻の中で、七つの星を手にしていました。「1:20 あなたがわたしの右手に見た七つの星と、七つの金の燭台の、秘められた意味について。七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。」星は、七つの教会に遣わされた御使いであり、その星を手をしているので、教会がすべて主の御手の中にある、ということです。

主がご自分の手にしているということは、二つの意味があります。一つは、自分のものではないのに、しがみついて自分のものにしてしようとしているものを、主は手放されます。ご自身のものなので、私たちがしがみついているものを手放すように導かれます。主が来られる時に、金や銀のように、純粋な信仰の部分は残りますが、その他の不純物は、燃える火の中で精錬されて、何も残らなくなります。「I コリ 3:12-15 だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。だれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。だれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かります。」

もう一つは、御手の中にあるというのは、自分自身が守られているということです。自分にある不純物、イエス様ではなく、他のものにしがみつこうとするのは取り除かれますが、しかし、イエス様だけに頼る、その純粋な信仰は、どんなことがあっても、主は必ず守られるということです。「ヨハ 10:29 わたしの父がわたしに与えてくださった者は、すべてにまさって大切です。だれも彼らを、父の手から奪い去ることはできません。」前回学んだ、ユダの手紙は、まさに、いかにイエスが私たちを守ってくださるかを教えていたものですね。「1 イエス・キリストのしもべ、ヤコブの兄弟ユダから、父なる神にあって愛され、イエス・キリストによって守られている、召された方々へ。」「24 あなたがたを、つまづかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びとともに栄光の御前に立たせることができる方、」2 章以降に学ぶ、七つの教会に対して、勝利をする者たちをたしかに守る約束に満ちています。

ですから、私たちの礼拝は、神の愛によって守られていることを確認しつつ、この方を王として恐れかしこんでお迎えするということです。イエスは、弟子たちに神を恐れることと、神に愛されていることの二つを教えられました。ルカ 12 章 4-7 節を読みます。

4 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。6 五羽の雀が、ニアサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられてはいけません。7 それどころ

か、あなたがたの髪の毛さえも、すべて数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、多くの雀よりも価値があるのです。

ゲヘナに投げ込む権威のある方が、私たちの神です。しかし、この方は同時に、私たちの髪の毛さえも数えている、決して私たちを見捨てない方です。恐れることはないのです。他のものを恐れて、この方を恐れないことがあってはいけません。恐れるは、大事にすると言い換えていいです。他のものを大事にして、神を第二、第三にすることがあってはいけません。この方を、王の王、主の主として恐れ敬うのです。しかし、その畏れ敬いの中で、私たちは神の限りない慈しみ、憐れみ、愛を知るのです。